

「詩式一卷、唐釋皎然」と、見えているわけ、即ちそこに、一卷本と五卷本の性質について述べていることは、上述した如くである。ところで、陸心源は盧拘經舊藏の中から、五卷本詩式を發見している。そして、彼はこれこそ、珍本中の珍本であると、甯宋樓藏書志において、「四庫館開時未見此本。進呈者惟後人撰拾之一卷本。故斥而不收。此本首尾完具。知爲罕觀之祕笈矣。」と自負している次第で、かくして、現詩式には、人も知るように、五卷本と一卷本の二種が行われているのである。

傳本の一巻本詩式は、寓目する限り校合してみると、全、すべて、明版の説郭本の系統に屬しているようである。そして、そこにはわずかに一二の文字の變化があるのにすぎない。その上、この説郭本系統のテキストは、現在に至るまで、明以前のものは、見出されてはいないよう、且つ卷數も新唐書所載のものから考えると少く、明らかに缺本であろう。又、内容的にみると、⁽³⁾歷代詩話考索や、⁽⁴⁾四庫提要の指摘するように、疑問の點が多く、これを詩式の佚文として、そのままに全部信ずるわけにはいかなない點が多い。

そこで、詩式の本文について、原典批判の必要がある。今、それについて試みると、先ず、詩式の殘簡として、傳えられているものは、宋代の諸書に引用されているものがそのよう、これは、唐代の詩式の姿を恐らくは、そのまま殘しているものと、考えられる。その理由は、宋代には、目錄上、明らかに五卷本が傳承されていたからである。即ち計有功の唐詩紀事と、魏慶之の詩人玉屑に引用されているものがそれである。

まず唐詩紀事の上についていうと、即ち卷七十三に、僧皎然の條があつて、そこには詩式と明言して、(1)偷語詩例、(2)偷意詩例、(3)偷勢

詩例、(4)跌宕格二品、(5)澗浚格一品、(6)調笑格一品、が引用しているわけ、これは、本書において詩式と明言して引用してある唯一の殘簡であろう。今この内容について考察してみると、何れも詩についての法則を述べたものであつて、題意の示すところと、一致しており、且つ、この部分を流布本と校合してみると、その順が、上記の番號において、例えば(4)(5)(6)(1)(2)(3)と逆になつておるほかは、文字の異動も少いのであつて、詩式の最も古い姿を示しているものと推定される。ただ、これらの資料の中で、(3)(4)(5)について、四庫提要は、皎然と賀知章、李白、王昌齡と年代が近いのに引用してあるのは、彼の詩の引用法からみて、同感ができないと評し、「作文君」が、誤入したものであらうと、推定している。これについて、文鏡秘府論に引用されている皎然の詩議の殘簡の詩の引き方をみると、六朝及びそれ以前のものが多いためであつてその理由は、一應、考えられる。ところが、その詩は、(1)駭俗(賀知章)(2)戲俗(李白)(3)偷勢詩例(王昌齡)が引かれており、(1)(2)の場合は、末尾に引かれているので、四庫提要の説も成立するが、(3)の場合は、最初にあり、引用法からみて、そうとは考えられぬ。この考えに對し、李淑の詩苑類格本に引用されている、詩式の佚文らしいものによると、(詩人玉屑卷五所引)は、(3)の場合も末尾にある。ただ、これは、偷語、偷意、偷勢の三例の詩の引用があるが、現行詩式と校合すると、全部、逆になつていゝのも問題であらうともあれ、唐詩紀事にも引用されているので、やはり、詩式の佚文と推定する。

次に、玉屑本所引のものは、卷五に、「下八條釋皎然述」としてゐる部分で、それは、(1)四不、(2)四深、(3)二要、(4)二癡、(5)四離、(6)六迷、(7)七至、(8)七德、(9)三偷などが見えている。さて、これらを流布

本と校合してみると、この部分は、條目も本文も存在しているが、ただ、文字の變化が相當あることは、注目すべきで、これは單に筆者の誤りであるとは、斷じられない點が多いことも、一考すべきであろう。ともかく、玉屑本には、詩式とは明言していないが、その内容は、詩家の眼目について述べてあり、また、唐詩紀事に、詩式と明記されて、引用されている三偷の條が、本書にも引かれていたので、恐らくは、詩式の一部であろうと推定する。これらの詩式の殘簡について、考えてみるに、原典においては、もう少し、その順が數學的に、整然と、二、二、(三)、四、四、(四)、六、七、七、(一)は缺)と述べられてあつたのではあるまいか。それは、流布本には、この條目の他に五格などという章もあり、中國人の文學表現の形式から考えても、當然、整然と著述されるべきであろう。即ち相當數の條目が缺けて、失われているもののように、なお、卷數から考えても、更に殘簡詩議の例から考えても、その條目には、多くの引用詩があつたものと推定される。

さてこれら詩式の殘簡からして、唐代の詩式について考えてみると、即ち詩式は、作詩家の注意を述べたものであつて、その爲の法式の眼目と、その爲の詩とを引用してあつたものであろう。そして、その表現は、極めて簡明であり、比較的に四字句が多く、引用詩は六朝のものが多く、復古的な文學思想をもち、佛家の語が、多數用いられていたのである。

次に、これらの條件にあてはまるものを、流布本によつて推考してみると、幾つかの唐代詩式の、殘簡らしいものが浮び上つて来る。(1) 明勢、(2) 明作用、(3) 明四聲、(4) 詩有五格、のような部分は、詩式の一部と、考えて良いであろうと思う。それは、これらの條目は、唐代の

文學論を集成したという文鏡祕府論の中にもあり、詩論のテキストとしては、當然、存在すべき條目でもあろうし、詩式の表現形式や内容から考えて、充分ある可きものだからである。また、皎然の著といわれる詩議や、詩評の題名や、殘簡から考えても、その範圍には、これらに入りそうにも思われない。それ故、流布本の詩式に引用されているもので、それらの章は、詩式の殘簡であると信じてよいであろう。

さて、これら以外は、流布本に引用されていても、これを詩式の殘簡として、そのまま信ずることは、いろいろと問題がある。それは、詩式の中には、皎然の他の著書がまぎれ込んでいると、思われるからである。特に、詩議との誤用は甚しいのではないだろうか。それを物語るものとしては、流布本の詩議の後半は、詩式と相一致する部分が多いのでも判るであろう。勿論、明代において詩議を作る時、詩式から取つたものと考えられることもできるが、取られたということは、一面において近似的性格であつたからであろう。何れにしても、この問題を解く鍵は、文鏡祕府論に引用されている詩議の殘簡である。文鏡祕府論には、あきらかに詩議と記されている部分卷四や、また單に、「皎白」としてある部分卷五と、二種類が引用されている。一體、詩議とは何を書いたものであろうか。題意によつて考えてみると、恐らくは詩について、いろいろ議したものであろう。そのことについて、引用文によつて窺うに、それは題意を示しており、詩の例句をあげて説明しているように、即ち詩式が詩を作る注意を述べたのに反して、讀む人に對して参考になる論を述べたものであるらしい。これら殘簡と、流布本詩議とを校合してみると、多少の文字の誤脱はあるが、大體において互に一致する。又、「皎白」としてある部分も、内容から考えて詩議の部分であるように思われる。ここで問題になるのは、空海

が詩式をみていたかどうかというところで、彼の御將來目錄や、文集中の序などをみても、詩式の名は見えていないし、又、文鏡祕府論にも、皎然の詩式と明言された處はない。恐らく、在唐中に詩議は入手されたが、詩式は見なかつたものと推定する。であるから、文鏡祕府論所引て現行詩式にある句は、散逸した詩議のものであらう。然らば、詩式の第十七章の語似用事義非用事の「彭薛纜知恥」の以下十六字、及び、第十八章の取境の「又云不要苦思」の以下十二字が、文鏡祕府論卷十一に引用されているが、詩式の原文には恐らくなかつたものであらう。即ち、詩議本にあつたものが、明代において詩式を作る時に入つたのではあるまいか。勿論、二箇處とも詩議本に引用されていることは、更に一つの裏付ともならう。

こんな風に考えて來ると、現在、詩式に含まれている次の諸章は、何れも現存詩議本にも引用されているが、その内容や、表現形式に照して考えてみると、詩式の一部だとは、考えられない。即ち第十四章鄭中集は鄭中七子中の陳王、劉楨の二氏についての詩評であり、内容的に詩式という部類にも屬さないし、且つ、不拘對屬といつてゐるのは、對を重んじてゐる彼の意見（文鏡祕府論引用詩議による）とも反對である。そして文章も切れぎれで、文章も續かないやうで、即ち何かの寄せ集めであらう。第十五章文章宗旨は、康樂公即ち謝康樂に對する詩論で、これは明らかに内容からみて、詩評のものであらう。ただ、皎然の詩評そのものは、斷簡すら残つていないが、唐代に近い滄浪詩話中に、嚴羽の詩評が残つてゐる。これは後世のものであるが、この章の記述と殆んど一致してゐることは、一つの裏付けともならう。第十六章用事、本章の用事という單語は、文鏡祕府論所引の詩議にも出ているものであり、思想的にみても、比興の定義や、引用詩は、皎然

の定義と一致するから、皎然のものであらうが、文章が、切れぎれで、どうも寄せ集めの感が深い。第十九章重意詩例は、題名も詩議にもあるが、内容は、恐しく不統一で、文外之旨を悟ることが出来るというのと、吳兢と玄奘が集めた詩集は、悪いといふのであつて、その内容からみると、詩評のもの集りのやうである。

次に、第二十三章對句、不對句と、第二十四章三不同語意勢と、第二十八章品藻で、みな現行詩議本にも、全然その引用はなく、いくつかの疑問が含まれている。前者は、對句の必要性を説いたものであつて、對句は自然のままなのがよいと、主張してゐる。なお、對句について、皎然は文鏡祕府論所引の詩議に、それを分類し、在來の説よりも八種の新説を、となえており、（事實は、舊説を合せて十四種を主張）、本文はその序のやうで、これだけでは、彼の考えに對し、説明が不足である。後者は、題名と内容は大變異つていて、その内容は、偷語、偷意、偷勢、について説明したものである。ここで注目しなければならぬことは、詩苑類格の佚文であつて、その表現や内容は、詩式の第二十四章の説明と、第二十五章の偷語詩例、第二十六章の偷意詩例、第二十八章の偷勢詩例の引用詩をまとめて、一章にしてあるのみであるが、その中、二十五、二十六、二十七章は、唐詩紀事にも全文が引用されておるので、今、何れが古い形のものであるかは、斷定し兼ねるが、ともかく、詩式の佚文であることには誤りがない。第二十八章の品藻の文は、文章が中斷されていて、文脈がつかない。文章として書かれたものなら、もう少し整然たるべきで、特に、文名の高かつた皎然の作としては疑いがある。

最後に問題になるのは、明代において詩式の斷簡を集めた時、皎然の他の著作か、又は他人のものかを挿入したものがあつてゐることである。

即ち第十三章の李少卿并古詩十九首と、第二十九章辯體有一十九字である。十三章の條の内容については同様のことが、文鏡秘府論卷十一に、引用されてある詩議にも述べられているが、ここで問題になるのは、五言の成立のことで、詩議では、「非本李少卿也。」と、文心雕龍明詩篇の説を取り漢書の説である李陵説を否定しているが、詩式では、「及乎成篇則始於李陵蘇武二子」と肯定していることである。このことは、資料としての價值から考えても、詩議の殘簡の方が正しいであろう。恐らくは、詩式のこの篇は本書を成立させる時、皎然の他の著から集めて、漢書の説によつて、表現したものはあるまいか。

又、辨體有一十九字章は、明の胡文煥も指摘する通り、前卷、後卷という文字の使用法より考えて、詩式の佚文ではあるまい。それは、唐代の詩式は五卷あつたはずで、これから推すに、二卷又は三卷あつたことになる。無理に推量するなら、詩評三卷が考えられる。恐らく、皎然の他の書物から入つたものであろう。それは、皎然集卷一、五言答鄭方回。の中に、澤君陽春詠。詞貞思且逸、と評してあるが、この貞、思、逸、の評語が何れも、十九字の中に含まれているからである。

以上の點からみて、一卷本詩式は、宋代の佚文と異つており、このことは、宋代以後のものであることを示している。更に、一卷本のもとになつていらしい説郭本という叢書は、明の陶宗儀が當時において逸失されていたテキストを、いろいろの本より選出して、一本として收めてある本が多いのであつて、このことは、前述のことと共に、一卷本詩式の明代編輯説を助ける一つの有力な證據にもなるであろう。また、五卷本の詩式は、目錄上からも失われている。故に一卷本詩式は、元末から明にかけて、皎然の詩論から雜然と集めて作つたものと

今本詩式についての疑(船津)

推定する。
然らば、次に問題になるのは、現存する五卷本詩式は、はたして唐代のものであろうか。先ず、一卷本詩式と比べて考える必要がある。そこで次に内容上の比較を試みてみる。

番號	一卷本詩式	五卷本詩式	格致本詩議	備考
1	明勢	同上		
2	明作用			
3	明四聲			
4	詩有四不			
5	詩有四深			
6	詩有二要			
7	詩有二廢			
8	詩有四離			
9	六迷			
10	六至			
11	七德			
12	詩有五格			
13	李少卿并古詩十九首同上			
14	鄭中集			
15	文章宗旨			
16	用事			
17	語似用事義非用事			
18	取境			
19	重意詩例			
20	跌宕格二品			

七三

詩議本では如宋王云の一條を一重意となし他を二重意とす。

吟窓雜錄所收詩式は七至とある。

21	瀕沒格一品	〃
22	調笑格一品	〃
23	對句・不對句	〃
24	三不同語・意勢	〃
25	儉語詩例	〃
26	儉意詩例	〃
27	儉勢詩例	〃
28	品藻	百葉芙蓉露菖照水例
29	辯體有一十九字	龍行虎步氣逸情高例 寒松病枝風擺半折例

即ち五卷本の第一卷は、大體、一卷本と一致している。そして、二卷以下は、ただ第十二の五格の説明を例題を數多くあげて、四卷にしてあるのにすぎない。それ故、問題になる部分である五卷本の第一卷と、一卷本とを校合してみると、五卷本には、第十三章の季少卿并古詩十九首から、第二十四章の三不同語意勢までと、第二十八章の品藻と第二十九章の辯體有一十九字までの十五章の書出しのはじめには、必ず、「評曰」としてあるが注意される。ところが、この「評曰」は一卷本では、どれも欠いている。一番古く詩式を引用している唐詩紀事にも、この二字は欠いている。このことは何を意味するのであるうか。

次に、五卷本には、引用詩の題名のないことである。これに反し、一卷本では、必ず引用詩には題名をつけている。即ち一卷本では、八個處に引用詩の題名があるが、五卷本では全部畧されている。然し、兩書とも引用詩の題名のあるのも一個處ある。なお、唐詩紀事本所引

では題名は欠いている。このことは、原典にあつたのが畧されたのか、實は無くして後になつて、挿入されたのかは、急に判断は出来ない。その他は、少數の文字の出入を除いては、殆んど相一致している。その變化の多くは、一卷本で明らかに誤つていゝと思われる點を訂正して、文意の通ずるようになつてゐるが、このことも問題になる。

なお、問題になる部分としては、一卷本にはなくて、五卷本にのみある部分である。即ち第十九章の重意詩例において、五卷本は二重意、三重意、四重意の三種の題目を掲げて、例詩を引用してゐる。この部分は、格致本の詩議にも引用されてゐるが、これと異なる點は、二重意において、如宋玉云のみを一重意とし、他を二重意としてゐることである。このことは、原來なかつたものか、或は後に挿入されたものかについては急に断定し難い。また、第二十八章品藻の後に五卷本のみ百葉芙蓉露菖照水例と、龍行虎步氣逸情高例と、寒松病枝風擺半折例の三例として各々詩が引用されてゐる。この詩は、明らかに品藻の説明の補注と見られるので、五卷本成立の時つけられたものであらう。

従つて、一卷本の詩式が前述の如く、僞書であるから、この五卷本の第一卷も、同じく僞書ということになる。また、この部分以外は、後世のものに引用されてゐないので、書誌學的には考察できないが、清の顧龍振の詩學指南本には、皎然の著である詩評として錄されてゐるのをみても、五卷本の僞書説を裏づける有力な點にもならう。

さて、五卷本の本文は、書史的に、一體どこまで溯れるであらうか。即ち古書に引用された殘簡と校合してみると、まず、唐詩紀事には、前述の如く、引用されているが、これらの本文を、五卷本と校合すると、(1)(2)(3)は五卷本に、殆んど近似である。(4)(5)(6)は五卷本は勿論、一卷本とも異つてゐる。その上、順がこれらと比べると、(4)(5)(6)(1)(2)

(3)となつてゐる。これはどういう意味であろうか。そのまま引用したなら、當然、一致すべきであろう。一致しないということは、そこに何等かの意味を考えねばならない。即ち唐代詩式は(4)(5)(1)(2)(3)となつていたのであろう。それは、詩式が詩の法則を述べたものであるから、その製作の順から考えても、唐詩紀事本の順の方が普通であろう。それは、唐詩紀事がこの部分を引用したのは、當時としては、佚文として珍らしかつたからであらう。引用するからには、忠實に引用したであらうと思う。それ故に、少くとも、五卷本のこの部分だけは、古い姿ではないことは、了解できるであらう。更に、細い點になると、なを、いろいろな點で現行本とは、違ふ點が多い。即ち跌宕格、涸浚格、調笑格、の各書出しには、「評曰」、という二字がないこと(これは一巻本にもない)ある。また、文字の變化は、跌宕格、涸浚格、調笑格、は甚しく、後の三例には殆んどない。その變化は、後世、寫本をする時の誤りらしく、唐詩紀事本の方が文意がよく通ずる。ただ、五卷本では、引用詩の題名はないが、唐詩紀事本にもない點は共通である。(一巻本にはある)。これらのことから、次のことが考えられるであらう。

(1)五卷本のテキストのこの部分は相當古い。逆に、五卷本のこの部分は、唐詩紀事本から引用したのかも知れぬ。

(2)この時代には、詩式は散佚して殘簡しかなかつたかも知れぬ。それは、計有功が何故にこの大部分のみを引用したかということ、唐詩紀事本の引用法をみても不明である。これは恐らく、散佚してしまつて珍らしいから引用したのではあるまいか。ところが宋の尤袤の撰と云われる全唐詩話にも卷六の僧皎然の條に、唐詩紀事と本文が引用されている。この本文を唐詩紀事と校合してみると、殆んど同じで、

跌宕格二品、涸浚格一品、調笑格一品、に、二三の文字の變化がある程度であるが、これと五卷本と比べると、驚く程に一致している。このことは、大いに問題を含むと思う。それは、全唐詩話は四庫提要によると、偽書であるといわれている。その上、尤袤の遂初堂書目には、詩式も詩議も記載されていないことは、これを證明する一つの證據とならう。ただ、全唐詩話が明代にできた津逮祕書におさめられているのであり、一巻本も明代に刊行されたのが傳承されているのをみても、五卷本の成立がこの頃で来たという一つの證據にもなる。

次に、詩人玉屑に引用された部分について考えてみると卷五に前述の如く引用されている。これと、現行本とを校合すると、下記の如くに、極めて多くの疑問を含んでおることは、重視されなければならぬ。まず、この部分について、五卷本と、一巻本とを校合してみると、一、二の文字の變化を除いて、殆んど一致している。然るに、玉屑本は、これらと大變異つてゐることに、注目されねばならない。即ち四不の條では、現行本は、十一字、四行から成立しているが、玉屑本は、五字四行から成立して、その反對條件の記述を缺いている。例せば、現行本では、氣高而不怒。怒則失於風流。が玉屑本では、氣高而不犯。となつてゐる。これらは、缺けても文意は通ずるが、現行本の如くであると、文意は、更に明瞭になると思う。他の引用例から考えても、これは玉屑本時代の詩式にはなかつたのであるまいか。次に、六迷は、現行本とは、(3)句と(4)句とが逆になつてゐる。逆になつても、文意上からは、各獨立の短句の集合であるから關係はないが、これは單なる引用をした時の誤りとは、思われぬ點がある。それは文字の移動からも考えられる。また、現行本では、六至とあるのに、玉屑本では七至とあり、至難而狀易の一句が多く、その順も、現行本の(1)(2)(3)(4)(5)(6)

が(1)(2)(7)(3)(4)(5)と變つてゐる。變つても文意上、その意味は通ずるけれど、これらのことは、唐詩紀事の引用も、現行本と順が逆になつてゐるのを併せ考えると、單なる誤寫であるとは斷じ得られないように、これは古い姿を示してゐるものであらう。更に、三偷の引用文を調べてみると、他の唐詩紀事引用のものや、流布本とは大變その順が異つてゐるので、現行本によれば、三不同語意勢、偷語詩例、偷意詩例、偷勢詩例、とに分類されて述べられてゐるが、玉屑本は、三偷の條にまとめられて述べられてゐるのであつて、この方が文章も整然としてゐる。又、その引用詩の順が現行本とは逆になつてゐることである。又、これらの引用文の文字についてみると、それは現行本とは、二三の出入のあるのを認める。それらの個々について考えてみると、玉屑本の方が明らかに通ずるのであつて、恐らく、現行本のは寫本の時の誤りであらう。この引用文の中、四深、二廢、四離の條は、明代にできた、王世貞の著である藝苑卮言本の引用と相一致してゐることは、藝苑卮言所引を考へる上において、注目すべきであらう。

これらのことから考へてみるに、玉屑本の時代の詩式と、現行本とは大變違つてゐて、甚しい脱落を認めねばならない。このことは、現行本が當時のテキストとは、大いに異つていたことを意味してゐるのではないであらうか。即ち現行本は、宋代以後のテキストによつてゐることを意味するものと思ふ。なお、何故に玉屑本がこの部分だけを引用したか、という疑問を解釋することのできる資料はないが、推定するなら、當時、五卷本の詩式は散佚しておつて殘簡のみで、珍らしいから引用したと考へては誤りであらうか。

以上、宋代の唐詩紀事と玉屑本に引用された詩式を調べてみると、現行本とは甚しい相違がみとめられる。これは現行本が、唐代のもの

でないことを示す一つの理由になるであらう。然らば、宋代には五卷本は殘存してゐたかと云うに、目錄上は、明らかに存在してゐるが、現實としては失われてゐたのではあるまいか。それは現存する引用文が何れも甚しく短かく、断片的にしか残つてゐないからである。然し、その殘簡は未だ相當に數多く残つていたらしく、そのことは引用文の種類が多いことから考へられる。

次に殘存する資料としては、元代において引用されたものは見當らず、明代になつて、再び現われてくる。即ち藝苑卮言卷一と梁燾の永川詩式卷九である。藝苑卮言には、四深、二廢、四離とが引用され、又、卷四に、僧皎然著詩式、跌宕格二品……とある。この引用文を校合してみると、四深と二廢の間にある二要の二句がぬけてあり、又、四深は現行本だと九字四行であるが、この引用文は八字四行となつており、上句と下句との間の「由」が全句にわたつて、抜けてゐる。これはなくとも文意は通ずるけれども、恐らくは、前後の事情からみて寫本の時の誤脱であらう。この引用文は細い點では相當現行本とは違つてゐるが、大體、玉屑本に近い姿を示してゐるのは、玉屑本よりの轉寫であらうか。又、氷川詩式の目錄によれば、卷八には附録として、僧皎然詩式として、跌宕格二品(駭俗、越俗)、灑落格一品(灑俗)、調笑格一品(戲俗)、があげられてゐるが、本文にはなく、卷九に、四不、四深、二要、二廢、四離、六迷、七至、七德及び三偷が引用されてゐる。これを校合してみると、詩人玉屑本所引と同じであるが、四離と六迷との間に四不入という一句が加わつてゐることである。これは現存する詩式にはないので、これが詩式殘簡の一部であると斷ずるには早計であらうが、詩式を順に引用してあるうちに挿入されてゐる點、名稱が四という數から考へて、何か詩式の一部らしい感じはする

が、明代まで引用されずして、このテキストに至つて、始めて挿入されたところに少しく疑問が存するようである。

以上の二書は、皆、玉屑本の引用の孫引であつて、現行本と相似は認められない。恐らく明代になつて、そのまま珍らしいので引用したのであらう。

ところが、明の胡文煥の撰になる格致叢書本には、皎然の著として詩議が收められている。これが陳振孫の書録解題に出ている詩議そのものであるかは別として、これと現行本詩式と比べてみると(圖表1参照)、第十三章李少卿并古詩十九首以下十六章が一致している。(その引用は部分的ではあるが、これを校合してみると、特に五卷本と相一致していて、一巻本とは一致しないことである。これは詩式を考える上で、大いに注目しなければならぬことである。それは胡文煥撰の詩議の前半のものは、文鏡秘府論引用の詩議と大體一致するが、詩式に一致する後半は、文鏡秘府論には、一句も引かれていないことである。このことについては、また考える可きであらう。即ち現行の詩議一巻は明代において、詩議の殘簡と、現行詩式からして、無雜作にあつめたのではあるまいか。それは、吟窓雜錄と、格致叢書本以外に詩議の刊本は存在せず、明版以前のテキストは傳承されていないからである。

以上、佚文と現行本について考えてみると、現行本との間には相當の違ひのあるのが認められる。即ち宋代の引用文をみると、現行本との相違は特に甚しい。このことは、宋代の引用文は、唐の五卷本の古い姿を残しているであらうから、詩式は宋末元初には亡びてしまつたのであらう。明代以後刊行されている一巻本のテキストは、唐代のもの、唐の殘簡集であつて、唐代の何分かの姿を残しているけれども、そ

今本詩式についての疑(船津)

の内容は種々な皎然の著作の集合のようである。その製作年代も明の頃であらう。従つて、その系統に屬する五卷本は、書史學的には恐らく引用文の校合からみて、明代以後のものであらう。(完)

註(1) 說郭本、續百川學海本、學海類編本、歷代詩話本、螢雪軒叢書本。

(2) 五卷本は吟窓雜錄にも收められておるが、舊陸心源藏本と校合すると、吟窓本の方が脱略が多い。

(3) (イ)晝公論泐沒格云如夏姬當墟似蕩而無論夏姬無當墟故實且安得云貞想是作文君之訛然閣諸本皆同未敢擅改。

(ロ)考晝公詩式有五卷又有詩評三卷今非全本矣中有云注於前卷後卷不復備舉訛脫之一證也。(胡文煥、歷代詩話考索)

(4) (イ)陳氏又載正字王元擬皎然十九字一卷使僅如今本一條則不能擬爲一卷矣殊參差可疑。

(ロ)皎然與顏真卿同時乃天寶大歷間人。而所引諸詩學以爲例者有賀知章李白王昌齡相去甚近。亦不應遽與古人並推擬原書散佚而好事者據拾補之也。(四庫全書總目提要)

(5) 不用事格……………第一卷(約三十首)

作用事……………第二卷(約百七十首)

直用事……………第三卷(約百三十四首)

有事無事……………第四卷(約百四十九首)

有事無事情格……………第五卷(約七十五首)

(6) 吟窓雜錄の詩議は二三の文字の異動を除き格致本詩議と同じであるが、只、卷末に、中序、團扇、王仲宣七哀、評古得失、三良詩西北有浮雲、池塘生春草明月照積雪、論陳子昂集叙、齊梁詩、(何れも五卷本詩式にあり)の九篇が多く、幾多の疑問が含まれている。